

## 変化の兆し

副会長 田中 勝志

(極東開発工業(株) 取締役社長)



私が子供の頃は家々の屋根には煙突があり、夕方ともなればそここの煙突からゆらゆらと煙が立ち昇る景色があった。煙突掃除は子供の仕事であった。屋根に登り上から竹ヒゴの先のたわしを口径3インチ程のブリキ管(煙突)に通すのである。危ないから屋根に登るな、などと誰も言わない。焚き火などもあちこちで見られた。ダイオキシン問題が出てくる以前の風景である。

今ではスイッチ一つで火がつくコンロ、炎さえ出ないレンジなど、どんどん便利なものが世に生み出されている。特に携帯電話は目を見張るものがある。次世代型が出てきたと思ったら次々世代型が現れる。私にはどれが最新型なのかももう見分けられない。

最近こうした便利さを求める物質文明の発達と拡大に伴って環境問題が生まれてきた。人類文明の豊満な進歩にブレーキを掛け、調和が叫ばれるようになってきたのである。昔の環境問題は地域内で用が足りたが、今ではそれが国を越え世界規模の話になってきている。フロンガスやNOxから今ではCO<sub>2</sub>そのものが話題の中心になっている。

こうした地球への人為的汚染について、警告され認識するよう世論が沸き立ってきたことを、私は一つの新しい文化の創生だと思う。いわゆる共通の価値観が出来て、新しい文化が生まれてきた訳である。この文化に沿って多くの製品が生まれ、人々の行動の様態が選択されてゆくのであろう。もちろん地域よっての温度差はあるが、いずれは隔々までこの文化が浸透してゆくものと思う。車両の排気ガス規制も大都市だけに留まらないかも知れない。

日本の医療現場でも変化があった。1カ月ほど前、体調が優れない日が続いていた。熱は特に無いのに風邪のように身体がだるく寝汗をよくかくのでどこか悪いところがあるのではと、会社が契約している病院へ行った。医大から派遣された若い先生が診てくれた。いろいろ調べてくれたが、特定すべき悪いところはないようだ。先生はしばらく考えてカルテ

に「虚証」と書いて、効能を説明した上で漢方薬を処方してくれた。東洋医学に興味を持っていた私は、この病院がまじめに漢方薬を処方してくれたことに驚いた。数日その薬を飲んでいるうちに身体は元気になった。

漢方は患部に直接作用するのではなく、身体が持っている自然治癒力を上手に引き出して治療するので、副作用も少なく身体に優しいと私は思っている。はっきり原因が判っていて即効果を期待する場合には西洋医学でないと間に合わない。

しかし多くの場合、そんな急病は少ない。調べてみると1976年に64種類の漢方製剤が初めてわが国の医療制度に取り入れられたそうである。その後増えてきたかどうかは知らないが、西洋医学と東洋医学の融合が医療現場でまじめに取り上げられ、実践され始めていることは喜ばしいことだと思う。一般的に東洋医学は病を病人として診るが、西洋医学は病気しか診ない。両者が結合して、両視点から診ることにより理想に近い医学となる。医療現場の新しい流れの一つである。

最近マスコミでは、倫理観欠如による違法事件があちこちで報道されている。昔だったらと高をくくっていた事柄も白日の下に晒され見逃されはしない。

もともと日本の仕組みは性善説で運用されてきたところがある。いつの頃からか性悪説で厳密に運用されるようになってきた。誰がパンドラの箱を開けたんだと言っても仕方が無い、時代が必要としている変化なのだから。

こうした風潮の背景にあるのが「フェアに」とか「ズルは許さない」といった正義感だ、と言ったら青臭いだろうか。私見であるがトラックの過積について、ヨーロッパなど先進国ではルール違反は「恥ずかしい」行為であり、中国などでは「当たり前」の行為であるという。嬉しいことに日本の若い人達の中には、前者が圧倒的に多くなってきているようだ。